

「ふね遺産」(応募様式)：佐賀藩建造蒸気船「凌風丸」と製造施設

2016年12月11日提出 氏名(個人名または団体の代表者名)：新開明二

所属(個人は住所)：ふね遺産西部地区調査検討委員会

メールアドレス：shinkaishinkai2015@outlook.jp

その他の連絡先：〒813-0011 福岡市東区香椎5-11-8 TEL 092-681-0313

	内容	備考
1. 対象物・資料の名称・所属または所有者	<ul style="list-style-type: none"> ・佐賀藩実用的蒸気船「凌風丸」(船長 18.2m 船幅 3.3m 蒸気機関 10馬力)と製造施設 ・凌風丸絵図、三重津海軍所絵図および遺跡 ・所属：佐賀市、公益財団法人鍋島報効会、佐嘉神社 等 	<p>日本初の実用的蒸気船の竣工、蒸気機関、ボイラー等の製作場の建設、造船および修船所建設について、多数の記録・資料・雛型模型などが存在し、乾ドックの遺構、船用金属部品製作遺構なども残っており、貴重なふね遺産</p>
2. 対象物の作成・存在時期	<ul style="list-style-type: none"> ・西洋軍事技術の導入、近代海軍の整備、オランダに蒸気軍艦「電流丸」を発注、西洋式艦船の国産化、黒船来航翌年 1854年 11月蒸気船の国産を目指す方針決定 ・1858年長崎海軍伝習所でカッター型帆船「晨風丸」を竣工。蒸気機関について、「電流丸」の交換用ボイラー、幕府船用のボイラー製造。1863年、佐野常民らを責任者とし、蒸気船の起工。佐賀藩の軍港である三重津海軍所で建造、からくり儀右衛門として知られた田中久重父子らにより 1865年に竣工、「凌風丸」と命名。 	<ul style="list-style-type: none"> ・蒸気船2隻・蒸気機関車雛型製作 ・「凌風丸」の推進方式は外輪船。船体は木造で、外板などはクスノキ材、甲板は松材が使われ、船底は汚れを防ぐために銅板被覆。 ・就役後、1865年には、藩主が乗船し諫早湾航海。その後も有明海での要人輸送などに使用。1870年有明海の竹崎鼻付近で座礁し廃船、外国人に売却。
3. 現状(写真添付)		<ul style="list-style-type: none"> ・三重津海軍所跡地に隣接して、佐野常民記念館が建設され、乾ドック等の遺構等は埋め戻され公園となる。 ・記念館では観覧コースが設けられ、各種復元模型、出土品展示、「VRスコープ」装置、「オキュラスリフト」により、映像と音声で解説 ・佐賀経済同友会は「凌風丸」を復元し、教育や観光などへの活用を図るよう提言中。
4. ふね遺産認定基準の該当項目	<p>【認定対象】(1)、(2)、(4)</p> <p>【認定基準】(7)、(11)</p>	<p>幕末期の佐賀藩の蒸気船設計・建造体制を認定対象とする。認定対象の構成物件として、蒸気船2隻・蒸気機関車の雛型、「凌風丸」絵図等。</p>
5. 歴史的・工学技術的意義	<p>産業基盤が無い幕末期に、近代造船技術の導入が試みられ、蒸気機関、ボイラー製作場、造船・修船所の建設により、我が国初の実用的蒸気船「凌風丸」が建造されたことは、造船技術史的に価値がある。蒸気船対応能力をみると、幕府は、建造は石川島、ドックは浦賀、機関は長崎と分散(石川島のドックの築造時期不明)。三重津海軍所ではこれらの全てを可能。幕末でボイラ製造が出来る唯一の施設。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・佐賀藩城下の築地反射炉により鉄製大砲の製造を担当した「精錬方」が蒸気船建造の中核。 ・幕府が建造した蒸気軍艦「千代田形」のボイラーは佐賀藩が受託製造。 ・田中儀右衛門は、芝浦製作所(後の東芝の重電部門)の創業者。
6. 参考資料・文献(本表に収まらない場合は別途添付する)	<ul style="list-style-type: none"> ・秀島成忠(編)『佐賀藩海軍史』復刻版原書房、1972年 ・國 雄行著『佐野常民』佐賀偉人伝 佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2013年 ・青木歳幸外(編)『幕末佐賀藩の科学技術上・下』岩田書院、2016年 	<ul style="list-style-type: none"> ・長崎海軍伝習所へ藩士らを入所させ、オランダ海軍教官団より知識を吸収。輸入軍艦への調査探究。 ・大砲製造、蒸気船造船等の高い軍事技術をもつ佐賀藩の影響が、明治維新後の造船産業へ波及。